保育実習における評価の“ズレ”の分析

佐々木　昌代　　久松　尚美

Analysis of Discrepancies found in the Evaluation of Training Programs in Child-care and Welfare Facilities

Masayo SASAKI　　Naomi HISAMATSU

Ⅰ．はじめに

本学保育科では、保育士資格および幼稚園教諭二種免許状取得のための実習（必修）は、①第１回保育所実習（「保育実習Ⅰａ」：１年次学年末）、②幼稚園教育実習（「教育実習」：２年次５月末～６月初旬）、③施設実習（「保育実習Ⅰｂ」：２年次夏季休業期間中）、④第２回保育所実習（「保育実習Ⅱ」：２年次11月前半）の順に行っている。当然ながら、学生はこれら４回の実習を通して学びを積み重ね、保育者としての実践力を身に付けていく。

これまでの学生の自己評価によると、①では、保育現場の実際を知るとともに、実習での学び方を学ぶ。例えば、保育を参観する中で浮かんだ疑問を保育士に尋ね、説明や指導を受けたことを記録することで保育理解をすすめるといったことである。②では、研究保育をやり遂げることから子どもの発達過程を捉えるとともに、具体的な保育の知識や技術を身に付ける。そのためには、事前に準備した遊びを部分保育として実践し、子どもの反応や幼稚園教諭のアドバイスによって自分の子ども観や保育理解を修正し、研究保育の計画･実践に反映していく。③では、困難を抱えた入所児・者が懸命に生きている姿から自分自身について振り返り、保育者としての生き方を捉え直す。所謂、自己覚知である。特に、小学校・中学校教諭免許状取得のために他学科の学生が同じ時期に施設での介護等体験実習を実施するようになってからは、保育実習においては入所児・者一人一人を尊重する保育者としての姿勢の獲得こそより重要であると分かった。④では、それまでの実習での学びを総動員して、一人前の保育者として実習を全うする。

このように、実習から戻った学生たちに教えられたり気付かされたりして、以降の実習指導を改善するヒントを得てきた。しかし、最近は様子が違ってきている。実習での学びが不明確なばかりか、目的意識が希薄なまま実習に臨んだのではないかと思われる学生も目につくようになった。さらには、欠席や遅刻についての連絡・報告のルールを守っていない学生、研究保育指導案や日誌を約束通りの日時に提出できない学生も見られるようになった。「実習先ではこういうことはしないように」といった禁止事項のエピソードは豊富になったが、学生の実習での学びを認め、実習で得た気付きを集約して次の学年の実習指導に活かすというようなことは難しくなった。

よって､保育士養成課程の改訂に伴って実習指導が「保育実習指導Ⅰ･Ⅱ」として拡充され、実習評価票についても評価内容を具体的に示すなどの改良を行ったことを契機に、あらためて学生の①～④実習における学びについて検討することにした。実習ごとに実習評価票と学生の自己評価について分析し、相互の“ズレ”を実習指導上の課題として以降の実習に向けたガイダンスや次の学年の実習前指導に反映させてきた。また、実習評価票を改良

する手がかりともした。

そこで、本研究では、保育士資格取得のための３つの保育実習（①「保育実習Ⅰａ」、③「保育実習Ⅰｂ」、④「保育実習Ⅱ」）を通した実習の積み重ねにおける学生の学びについて、実習評価票と学生の自己評価の“ズレ”から検討することにした。

Ⅱ．研究の目的・方法

本学保育科平成24年度入学生が保育士資格取得のために履修した３つの保育実習に関して、評価票（実習先による学生の学びの評価）と自己評価（学生自身による学びの評価・振り返り）を集約、分析し、実習先と学生自身の評価の“ズレ”及び３つの保育実習間の評価の“ズレ”から、保育実習指導の課題を把握することを本研究の目的とする。

対象とした３つの保育実習

- 「保育実習Ⅰａ」（第１回保育所実習）（以下、Ⅰａと略す。）
  実習期間：平成 25 年２月 12 日（火）～ 25 日（月）
  実 習 先：140 保育所
  履 修 者：188 名
  （200 名履修したが、自己評価未提出者を除いた。）
- 「保育実習Ⅰｂ」（施設実習）（以下、Ⅰｂと略す。）
  実習期間：平成 25 年度夏季休業期間
  実 習 先：51 施設（乳児院１　児童養護施設９　障がい児・者支援施設 41）
  履 修 者：183 名
  （188 名履修したが、病気により実習期間を変更した者、自己評価未提出者を除いた。）
- 「保育実習Ⅱ」第２回保育所実習）（以下、Ⅱと略す。）
  実習期間：平成 25 年 11 月５日（火）～ 18 日（月）
  実 習 先：137 保育所
  履 修 者：183 名
  （188 名履修したが、病気により実習期間を変更した者、自己評価未提出者を除いた。）

Ⅲ．結果及び考察

１）実習態度、日誌についての評価

- 出勤時刻（Ⅰａ、Ⅰｂでは出勤・退勤時間としていたが、Ⅱより出勤に絞るとともに時刻に改めた。）については、評価票、自己評価ともにⅡで低下しているが、評価票に30分前出勤と明記したためである。実習先よりは「ここまで要求していない。」とのコメントがあり、予め実習先より着替えや準備の時間を含めて早めの出勤時刻が指示されているにも関わらず一律にそれより30分前に出勤と考えてしまう、状況に応じた判断ができない学生の様子も見られ、余裕を持っての出勤についての指導は再考すべきである。
- 欠席しないことが前提であるが、万一欠席した場合は、実習先への連絡と学校への報告を徹底するように指導している。極限られた学生ではあるが、徹底できていな

い。なかには、連絡の有無について実習先との“ズレ”があり、連絡や報告を怠ったことを自覚して、反省する様子がうかがえない者がいる。このことは、毎年度、Ｉａの反省としてＩｂの前指導で、Ｉａ、Ｉｂの反省としてⅡの前指導で学生全体に繰り返し指導し、個別指導も行っているが、徹底できていない。なお、欠席、遅

保育実習Ⅰａ（第１回保育所実習）　Ｑ１．実習態度、日誌について

表1-1 実習態度、日誌についての評価内容及び評価基準（Ⅰａ）

評価内容	評価基準
Q1-①出勤・退出時間	3:厳守されていた 2:ほぼ守られていた 1:守られていないことが多かった
Q1-②欠席などの連絡	3:遅刻・欠席などなかった 2:必ず連絡があった 1:連絡がない場合があった
Q1-③欠席などの補充	3:遅刻・欠席などなかった 2:実習生から申出があった 1:実習生から申出がなかった
Q1-④挨拶や服装	3:実習生として適切であった 2:徐々に実習生として適切になった 1:実習生として適切でなかった
Q1-⑤言葉遣い	3:実習生として適切であった 2:徐々に実習生として適切になった 1:実習生として適切でなかった
Q1-⑥指導を受ける態度	3:実習生として適切であった 2:徐々に実習生として適切になった 1:実習生として適切でなかった
Q1-⑦日誌の提出期限	3:厳守されていた 2:ほぼ守られていた 1:守られていないことが多かった
Q1-⑧日誌の記述(誤字・脱字)	3:誤字・脱字はほぼなかった 2:徐々に誤字・脱字が少なくなった 1:誤字・脱字が目立った*

＊自己評価では「1:誤字・脱字に十分留意しなかった」

表1-2 実習態度、日誌についての平均点（Ⅰａ）

評価内容	評価票	自己評価
Q1-①	2.95	2.91
Q1-②	2.86	2.79
Q1-③	2.83	2.82
Q1-④	2.88	2.65
Q1-⑤	2.87	2.58
Q1-⑥	2.87	2.58
Q1-⑦	2.84	2.83
Q1-⑧	2.55	2.11

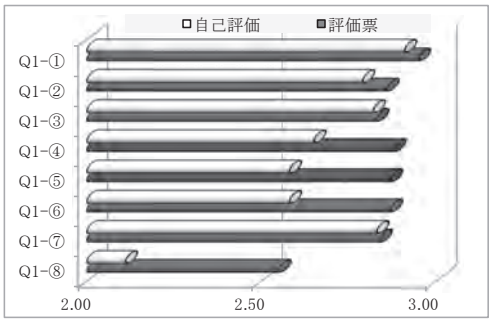

図1 実習態度、日誌についての平均点（Ⅰａ）

保育実習Ⅰｂ（施設実習）　Ｑ１．実習態度、日誌について

表2-1 実習態度、日誌についての評価内容及び評価基準（Ⅰｂ）

評価内容	評価基準
Q1-①出勤・退出時間	3:厳守されていた 2:ほぼ守られていた 1:守られていないことが多かった
Q1-②欠席などの連絡	3:遅刻・欠席などなかった 2:必ず連絡があった 1:連絡がない場合があった
Q1-③欠席などの補充	3:遅刻・欠席などなかった 2:実習生から申出があった 1:実習生から申出がなかった
Q1-④挨拶や服装	3:実習生として適切であった 2:徐々に実習生として適切になった 1:実習生として適切でなかった
Q1-⑤言葉遣い	3:実習生として適切であった 2:徐々に実習生として適切になった 1:実習生として適切でなかった
Q1-⑥指導を受ける態度	3:実習生として適切であった 2:徐々に実習生として適切になった 1:実習生として適切でなかった
Q1-⑦日誌の提出期限	3:厳守されていた 2:ほぼ守られていた 1:守られていないことが多かった
Q1-⑧日誌の記述(誤字・脱字)	3:誤字・脱字はほぼなかった 2:徐々に誤字・脱字が少なくなった 1:誤字・脱字が目立った*

＊自己評価では「1:誤字・脱字に十分留意しなかった」

表2-2 実習態度、日誌についての平均点（Ⅰｂ）

評価内容	評価票	自己評価
Q1-①	2.90	2.85
Q1-②	2.97	2.95
Q1-③	2.97	2.95
Q1-④	2.80	2.76
Q1-⑤	2.76	2.51
Q1-⑥	2.71	2.54
Q1-⑦	2.90	2.89
Q1-⑧	2.66	2.30

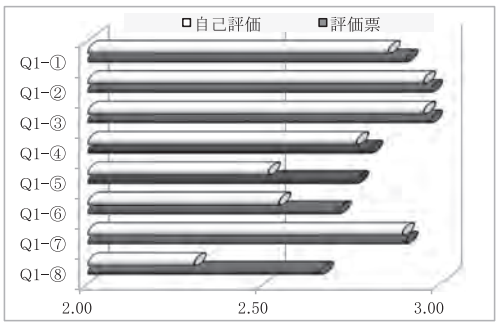

図2 実習態度、日誌についての平均点（Ⅰｂ）

保育実習Ⅱ（第2回保育所実習）　Ｑ１．実習態度、日誌について

表3-1 実習態度、日誌についての評価内容及び評価基準(Ⅱ)

評価内容	評価基準
Q1-①出勤時刻	3:余裕を持って(30分前に)出勤した 2:遅刻はなかった 1:遅刻があった
Q1-②挨拶や服装	3:適切な挨拶や服装だった 2:徐々に適切な挨拶や服装になった 1:適切な挨拶や服装ではなかった
Q1-③言葉遣い	3:適切な言葉遣いであった 2:徐々に適切な言葉遣いになった 1:適切な言葉遣いではなかった
Q1-④勤務態度	3:意欲的な勤務態度ではなかった 2:徐々に意欲的な勤務態度になった 1:意欲的な勤務態度ではなかった
Q1-⑤指導・助言を受ける態度	3:適切な態度だった 2:徐々に適切な態度になった 1:適切な態度ではなかった
Q1-⑥日誌の提出期限	3:厳守した 2:1～2回守られていないことがあった 1:守っていないことが多かった
Q1-⑦日誌の記述(誤字・脱字)	3:誤字・脱字はほぼなかった 2:徐々に誤字・脱字が少なくなった 1:誤字・脱字が目立った*

＊自己評価では「1:誤字・脱字に十分留意しなかった」

表3-2 実習態度、日誌についての平均点(Ⅱ)

評価内容	評価票	自己評価
Q1-①	2.43	2.23
Q1-②	2.90	2.76
Q1-③	2.92	2.64
Q1-④	2.77	2.48
Q1-⑤	2.91	2.73
Q1-⑥	2.91	2.77
Q1-⑦	2.67	2.35

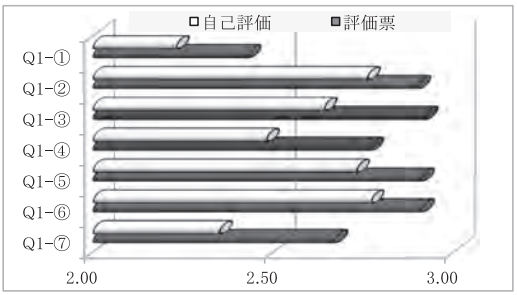

図3 実習態度、日誌についての平均点(Ⅱ)

刻、早退した場合の連絡・報告及び補充については、皆勤した学生には不要のことであるので、Ⅱより、実習態度ではなく、出勤状況について確認する項目として別途設定し、該当する学生だけが回答するようにした。

- 挨拶や服装、言葉遣い、勤務態度、指導（指導・助言）を受ける態度、日誌の提出期限についても、自覚に欠ける学生がいる。評価票を工夫したことで、実習先より徐々に改善が認められた学生と改善が認められなかった学生を判別でき、事後の個別指導に繋がった。また、学生としては改善できたとしているが、不適切なままだったとする評価票との“ズレ”も認められる。自分なりにできたではなく、実習先に伝わる努力、意欲、実践が求められていることを理解させたいが、実習先の指導や評価にも温度差があり、学生の言い分や思いもきちんと受けとめた上で指導する必要がある。総合評価についての理由、コメントとして「誤解された。」「そんなつもりではなかった。」と学生が自己評価に記載していることもある。
- 指導を受ける態度について、Ⅱより勤務態度と指導・助言を受ける態度に分けたところ、評価票、自己評価ともに指導・助言を受ける態度の評価が高い。やはり、実習先の指導・助言に素直に従うより、自らすすんで意欲を示すことの方が難しいようである。
- 日誌の記述（誤字・脱字）については、Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱの何れでも、評価票、自己評価ともに、もっとも評価が低い。３つの実習すべてにおいて誤字・脱字が目立った（少なくならなかった）と評価された学生もいる。辞書の使用を促しているが、実行できていない。根気強く、習慣化する指導が必要である。
- Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱのすべての項目で、評価票の評価より自己評価が低い。最後の実習であるⅡに至っても、十分に評価差は縮まっていない。社会人として、一人前の保

育者として、自分自身を厳しく評価しているようにも思われるが、自信のなさの現れであれば、実習先の評価の伸びを伝える必要がある。況してや、自己評価通り、全実習の総括であるⅡにおいても、適切な態度ではなかった、守っていないことが多かった、十分に留意していなかったが解消されていないのであれば、実習先より指摘される「学生としての甘えは捨てて実習を行ってほしい」ということであろう。Ⅱより、学生としてではなく先生（保育者、職員）として実習に臨むことを明確にするために、言葉遣い、挨拶や服装、勤務態度、指導・助言を受ける態度の評価基準から「実習生として」を削除した。ＴＰＯに応じて容儀を正すことも、出勤時刻や提出期限を守ることと同じく、実習生だからと寛容に許されてよいことではない。

２）実習内容についての評価、総合評価

- 子ども（利用児・者）への関わりについては、Ｉａ、Ｉｂでは自己評価が評価票を上回っているが、Ⅱでは評価票が上回っている。さらに、実習を重ねるごとに、自己評価が低下している。子ども（利用児・者）一人一人の個人差や発達の違いを考慮した関わりを意図して、高いレベルを求めていたためではないかと思われる。
- 先生方（指導者やスタッフ）への質問については、Ｉａ、Ｉｂ、Ⅱの何れでも、評価票、自己評価ともに、もっとも低い評価となっている。評価票は実習を重ねるごとに僅かながら評価が上がっているが、自己評価は伸びていない。積極的に先生方へ質問する姿勢は、意欲的に実習に臨む姿勢（勤務態度）とともに、実習において一番に実践してほしいことであるので、これまで以上に保育実習指導Ⅰ・Ⅱで質問力向上に取り組みたい。

保育実習Ｉａ（第１回保育所実習）　Ｑ２．実習内容について

表4-1 実習内容についての評価内容及び評価基準（Ｉａ）

評価内容	評価基準
Q2-①保育を参観し、保育所・園の保育目標や一日の流れを理解しようとした。	A(5)：実習生として優れている B(4)：実習生としてやや優れている C(3)：実習生として適切である D(2)：実習生として努力を要する E(1)：実習生として成果が認められない
Q2-②子どもを尊重し、積極的に関わりながら、乳幼児の発達について理解しようとした。	
Q2-③子どもの援助・指導について先生方に具体的に質問し、学ぼうとした。	
Q2-④保育に参加し、保育士の仕事やチームワークの実際を理解しようとした。	
Q2-⑤延長保育など多様な保育サービスも体験し、その必要性を理解しようとした。	
Q2-⑥保育を部分的に担当し、保育技術を身に付けようとした。	
Q2-⑦保育所・園全体の安全・衛生面の仕組みについて学ぼうとした。	
Q2-⑧子ども一人一人の安全・衛生面の配慮について学ぼうとした。	
Q2-⑨日誌の書き方について先生方の指導を受け、適切な内容を記述するよう努めた。	

表4-2 実習内容についての平均点（Ｉａ）

評価内容	評価票	自己評価
Q2-①	4.25	4.42
Q2-②	4.05	4.21
Q2-③	3.65	3.45
Q2-④	3.82	3.90
Q2-⑤	3.54	3.82
Q2-⑥	3.87	3.49
Q2-⑦	3.81	3.93
Q2-⑧	3.82	4.06
Q2-⑨	3.86	4.06

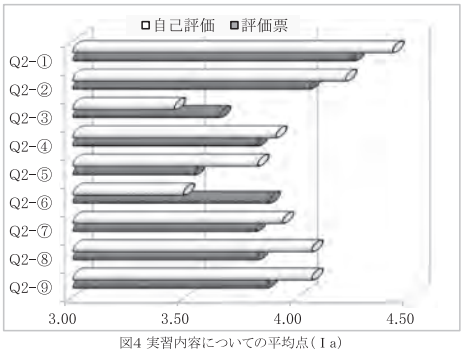

図4 実習内容についての平均点（Ｉａ）

保育実習Ⅰb（施設実習）　Q2．実習内容について

表5-1 実習内容についての評価内容及び評価基準（Ⅰb）

評価内容	評価基準
Q2-①施設の目的、機能、利用児・者、業務内容などについて理解しようとしていた。	A(5):実習生として優れている B(4):実習生としてやや優れている C(3):実習生として適切である D(2):実習生として努力を要する E(1):実習生として成果が認められない
Q2-②利用児・者の援助・支援に関する知識、技術を身に付けようとしていた。	
Q2-③利用児・者を尊重し、適切な言葉遣いや態度で接していた。	
Q2-④利用児・者に積極的に関わり、理解しようとした。	
Q2-⑤利用児・者の個性や特性に応じた対応を考慮していた。	
Q2-⑥利用児・者の援助・支援について指導者やスタッフに質問し、理解しようと努めていた。	
Q2-⑦前日までの反省を踏まえて、より適切に利用児・者に対応しようとする姿勢が見られた。	
Q2-⑧職員間の役割分担やチームワークのあり方を理解しようとしていた。	
Q2-⑨施設全体の安全、利用児・者の安全や衛生面について配慮していた。	

表5-2 実習内容についての平均点（Ⅰb）

評価内容	評価票	自己評価
Q2-①	3.85	4.03
Q2-②	3.84	3.85
Q2-③	4.05	3.95
Q2-④	3.95	4.05
Q2-⑤	3.62	3.56
Q2-⑥	3.72	3.41
Q2-⑦	3.83	3.80
Q2-⑧	3.67	3.60
Q2-⑨	3.78	3.88

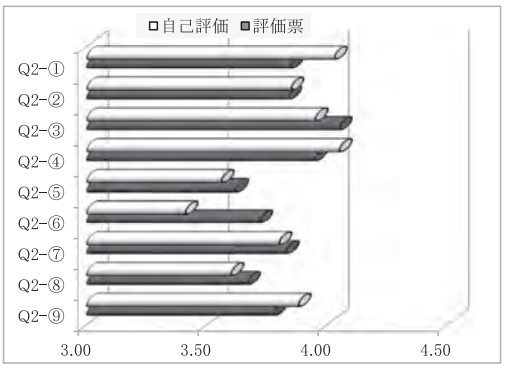

図5 実習内容についての平均点（Ⅰb）

保育実習Ⅱ（第2回保育所実習）　Q2．実習内容について

表6-1 実習内容についての評価内容及び評価基準（Ⅱ）

評価内容	評価基準
Q2-①個人差や発達の違いを考慮しながら、子どもへ積極的に対応しようとしていた。	A(5):実習生として優れている B(4):実習生としてやや優れている C(3):実習生として適切である D(2):実習生として努力を要する E(1):実習生として成果が認められない
Q2-②子どもの援助・指導について先生方に積極的に質問し、理解を深めようとしていた。	
Q2-③特別な配慮を要する子どもへの理解を深め、対応を学ぼうとしていた。	
Q2-④保育をすすんで担当し、保育技術を身に付けようとしていた。	
Q2-⑤延長保育など多様な保育サービスも体験し、その必要性を理解しようとしていた。	
Q2-⑥保育所・園全体や子ども一人一人の安全・衛生面について配慮しようとしていた。	
Q2-⑦事前に先生方より十分な指導を受け、準備を整えて（研究）保育に臨んでいた。	
Q2-⑧子どもの姿からふさわしいねらいや活動などを設定し、（研究）保育指導案を作成していた。	
Q2-⑨個人情報の取り扱いなどを通して、保育士の職業倫理を理解しようとしていた。	
Q2-⑩日誌は保育実習Ⅰaからの成長がみられる内容が記述されていた。	

表6-2 実習内容についての平均点（Ⅱ）

評価内容	評価票	自己評価
Q2-①	4.13	4.00
Q2-②	3.78	3.45
Q2-③	3.68	3.64
Q2-④	3.92	3.43
Q2-⑤	3.77	3.92
Q2-⑥	3.90	3.94
Q2-⑦	4.17	3.69
Q2-⑧	4.06	3.72
Q2-⑨	3.79	3.96
Q2-⑩	4.10	4.14

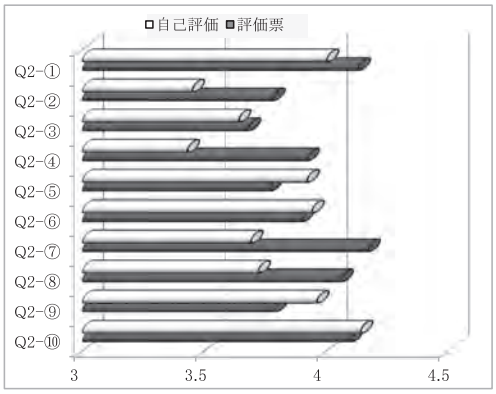

図6 実習内容についての平均点（Ⅱ）

保育実習Ⅰa（第1回保育所実習）　Q3．総合評価

表7-1 総合評価平均点(Ⅰa)

評価内容	評価票	自己評価
総合評価	3.90	3.42

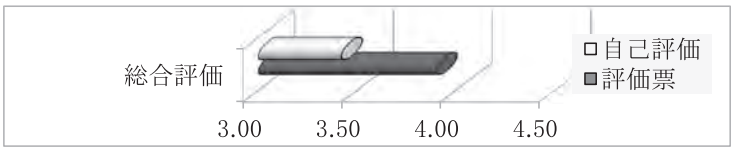

図7 総合評価平均点(Ⅰa)

表7-2「総合評価」との相関が高い項目別評価内容(評価票)(Ⅰa)

評価内容
Q2-④保育に参加し、保育士の仕事やチームワークの実際を理解しようとした。
Q2-②子どもを尊重し、積極的に関わりながら、乳幼児の発達について理解しようとした。
Q1-⑧日誌の記述(誤字・脱字)
Q2-③子どもの援助・指導について先生方に具体的に質問し、学ぼうとした。
Q2-⑥保育を部分的に担当し、保育技術を身に付けようとした。
Q2-⑤延長保育など多様な保育サービスも体験し、その必要性を理解しようとした。

表7-3「総合評価」との相関が高い項目別評価内容(自己評価)(Ⅰa)

評価内容
Q2-③子どもの援助・指導について先生方に具体的に質問し、学ぼうとした。
Q2-①保育を参観し、保育所・園の保育目標や一日の流れを理解しようとした。
Q2-⑥保育を部分的に担当し、保育技術を身に付けようとした。
Q1-②欠席などの連絡

保育実習Ⅰb（施設実習）　Q3．総合評価

表8-1 総合評価平均点(Ⅰb)

評価内容	評価票	自己評価
総合評価	3.81	3.44

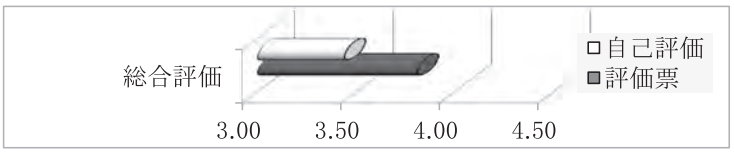

図8 総合評価平均点(Ⅰb)

表8-2「総合評価」との相関が高い項目別評価内容(評価票)(Ⅰb)

評価内容
Q2-⑦前日までの反省を踏まえて、より適切に利用児・者に対応しようとする姿勢が見られた。
Q2-①施設の目的、機能、利用児・者、業務内容などについて理解しようとしていた。
Q2-⑧職員間の役割分担やチームワークのあり方を理解しようとしていた。
Q1-⑤言葉遣い
Q2-②利用児・者の援助・支援に関する知識、技術を身に付けようとしていた。
Q2-⑥利用児・者の援助・支援について指導者やスタッフに質問し、理解しようと努めていた。

表8-3「総合評価」との相関が高い項目別評価内容（自己評価）（Ⅰb）

評価内容
Q2-①施設の目的、機能、利用児・者、業務内容などについて理解しようとした。
Q2-⑦前日までの反省を踏まえて、より適切に利用児・者に対応しようとした。
Q2-⑥利用児・者の援助・支援について指導者やスタッフに質問し、理解しようと努めた。
Q1-⑧日誌の記述（誤字・脱字）
Q2-⑤利用児・者の個性や特性に応じた対応を考慮した。
Q1-⑦日誌の提出期限

保育実習Ⅱ（第２回保育所実習）　Ｑ３．総合評価

表9-1 総合評価平均点（Ⅱ）

評価内容	評価票	自己評価
総合評価	4.06	3.56

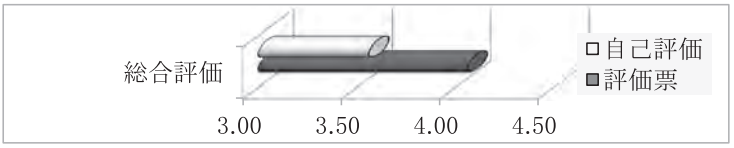

図9 総合評価平均点（Ⅱ）

表9-2「総合評価」との相関が高い項目別評価内容（評価票）（Ⅱ）

評価内容
Q2-⑩日誌は保育実習Ⅰaからの成長がみられる内容が記述されていた。
Q2-②子どもの援助・指導について先生方に積極的に質問し、理解を深めようとしていた。
Q2-①個人差や発達の違いを考慮しながら、子どもへ積極的に対応しようとしていた。
Q2-⑧子どもの姿からふさわしいねらいや活動などを設定し、（研究）保育指導案を作成していた。

表9-3「総合評価」との相関が高い項目別評価内容（自己評価）（Ⅱ）

評価内容
Q2-②子どもの援助・指導について先生方に積極的に質問し、理解を深めようとした。
Q2-⑦事前に先生方より十分な指導を受け、準備を整えて（研究）保育に臨んだ。
Q2-⑩日誌は保育実習Ⅰaと比べてより適切な内容が記述できた。
Q2-⑧子どもの姿からふさわしいねらいや活動などを設定し、（研究）保育指導案を作成していた。
Q2-①個人差や発達の違いを考慮しながら、子どもへ積極的に対応しようとした。

- Ⅰａにおいて、あまり質問できなかったことを反省した学生は、今後の課題として「子どもの活動を見るだけでなく、先生方の動きをもっと見て学ぶ。どうして今、先生が〇〇したのか考え、分からない場合には積極的に質問する。」ことを挙げている。日誌について「毎回活動が違って難しかったが、先生に質問すると丁寧に指導してくださり、日誌が書きやすくなり、具体的に書くことができた。」として、「⑨日誌の書き方について先生方の指導を受け、適切な内容を記述するよう努めた。」をＡ（５）とした学生は「もっと自主実習に行き、子どもへの接し方を教えていただく。」ことを今後の課題に掲げた。言って聞かせる実習指導では、学生を受け身の状態にして主体性を引き出さない。このような実習体験からの気付きや課題をタイミングよく捉えて、実践に繋げていく実習指導にしていかなければならないが、実習指導担当者としてもっとも苦慮するところである。実際、Ⅰａの自己評価の集約から得られた学生の有意義な気付きや課題も、他の学生に紹介して行動に移すよう促すところまでであった。

- 知識、技術（保育技術）の獲得については、Ⅰａ、Ⅱに比べ、Ⅰｂの自己評価が高い。障がい児・者への援助や児童養護施設での中高校生への支援などは、施設実習でなければ体験的できない。また、援助、支援のあり方を理解していなければ利用児・者と関わりにくい。そこに、学びの実感を持てたようである。Ⅰａ、Ⅱでは、保育技術を身に付けようとする前に、先生方より保育を任されるのを待たずに自分から担当を買って出るべきであったとの反省が低評価になっていると思われる。
- 安全や衛生面への配慮については、Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱの何れでも、自己評価が評価票を上回っている。子ども（利用児・者）の命を預かる保育現場において必須の配慮として、具体的に学べたとの思いが評価に現れたのであろう。
- 評価票ではⅠａ、Ⅱで総合評価が項目別評価の平均点より高く、Ⅰｂで等しいが、自己評価ではすべて総合評価が低い。加えて、Ⅱにおいても自己評価の総合評価が伸びていないことから、保育実習を積み重ねても学生が十分な達成感や満足感を得られていないことが危惧される。
- 総合評価との相関が高い項目別評価内容についてみると、Ⅰａでは、実習先（評価票）、学生（自己評価）ともに「先生方に質問」「保育技術の習得」が挙がっているが、実習先は「チームワークの理解」「乳幼児の発達の理解」「日誌の誤字･脱字」がより意識されているのに対して、学生は「一日の流れの理解」「欠席などの連絡」となっている。実習に臨むに当たって、保育所の生活の流れを理解するとともに、複数担任である保育所では保育士の連携が大切であるので実際にどのように連携が取られているのか見ること、年齢ごとに編成されたクラスを順に経験することで子どもの発達段階を具体的に掴むことを十分に説明したつもりであったが、学生の意識は質問するという実習の方法にばかり向いてしまったようである。実習指導において、質問することを強調し過ぎて、実習で何を学ぶかが相対的に希薄になっていなかったか検討する必要がある。
- 同様に、Ⅰｂでは、実習先、学生ともに「前日までの反省を生かす」「施設、利用児･者の理解」「指導者やスタッフに質問」が挙がっているが、実習先は「チームワークの理解」「知識、技術の習得」「言葉遣い」がより意識されているのに対して、学生は「個性や特性に応じた対応」「日誌の誤字･脱字」「日誌の提出期限」となっている。実習に臨むに当たって、「自己覚知」「一人一人への対応」に主眼を置いて学生を指導してきたが、学びの具体性に欠けていた。実習中は、その時、その場で利用児･者に対応することを通して、実習先が挙げる「チームワークの理解」「知識、技術の習得」「言葉遣い」について体験的に学び、実習を終えて「自己覚知」に至り、保育において一人一人に対応していくことが大切なのだということに思い至る。特に、「チームワークの理解」は、24時間体制の入所型の施設では、職員やスタッフの連携が重要である。連携の在り方を学ぶことは、保育所以上に、施設実習において必須のことであった。また、実習先は記録することより話すこと、言葉遣いにより敏感なようである。学生より年長の利用者がいることが影響していると思われる。実は、平成26年度より、「前日までの反省を踏まえて、より適切に利用児・者に対応しようとする姿勢が見られた」は短い実習期間で課題とするには難しいと考え、評価内容から省いた。実習先にも学生にも強く意識されていることから、あらためて、評価

内容に掲げなければならない。

- 同様に、Ⅱでは、実習先と学生が挙げている評価内容がほぼ共通している。学生に「事前に先生方より十分な指導を受け、準備を整えて（研究）保育に臨んだ」が追加されているだけである。実習先と学生の総合評価の観点が等しく、実習で学生がもっとも腐心する研究保育と日誌が観点に挙がっていることから、最後の締め括りに相応しい意識で学生が実習を行ったことがうかがえる。ただし、評価の観点が相応しいのであって、評価そのものが相応しいのではない。むしろ、相応しい観点であったがために、最後の実習にも関わらず厳しい総合評価点となったのかもしれない。
- 同様に、Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱを見通して学生の実習を通した成長をみようとするとき、Ⅰｂに日誌についての評価内容を含めるべきであるし、Ⅱに先生方（指導者やスタッフ）のチームワークの理解についての評価内容が含まれるべきである。評価票の改訂に際しては、個々の実習ごとに行うのではなく、学生が履修するすべての実習を見通して行わなければならないことがよく分かった。以降の評価票改訂では必ず留意したい。
- 学生（自己評価）によっては、実習内容ごとの評価に比べて、総合評価を厳しく評価する傾向がある。例えば、Ⅰｂにおいて、総合評価についての理由、コメントに「一生懸命取り組んでも、間違いや失敗がたくさんあった。たくさん失敗して、指導を受けて反省して、それでも学ぼうと頑張ったので、自分のなかではＣ（３）がふさわしいと思う。」と書いた学生は、実習先よりはＢ（４）を受けている。また、Ⅱにおいて「０歳児～５歳児までの子どもと積極的に関わることができてよかったが、疑問に感じたことをもっと積極的に質問すればよかった。日誌は、誤字・脱字が多かったので、調べたり見直したりすればよかった。」と書いた学生は、総合評価をＤ（２）と自己評価しているが、実習先よりはＡ（５）を受けている。評価票より高く“ズレ”て自己評価している学生に目を奪われがちであるが、実習先よりきちんと評価されているにも関わらず自己評価が低く“ズレ”ている学生への指導も忘れてはならない。

Ⅳ．まとめ

保育士資格取得のための３つの実習を通して評価票と学生の自己評価の“ズレ”から学生の実習での学びについて検討したところ、保育実習Ⅰａ、保育実習Ⅰｂ、保育実習Ⅱごとに振り返ったり、評価票（実習先による学生の学びの評価）と自己評価（学生自身による学びの評価・振り返り）を互いに擦り合わせることなく別々に分析したりしたのでは見出せなかった実習指導上の課題を明らかにできた。

特に、以下については、次年度の保育実習指導に向けて早急に改善することが必要と思われる課題である。

- 評価票に30分前出勤と明記した余裕を持っての出勤時刻の指導については、状況に応じた判断ができていない学生の様子から再考すべきである。
- 欠席などの連絡・報告を怠っていたり、適切な容儀で実習に臨んでいたか否かについて実習先とのズレが生じていたりする学生に対しては、実習先の評価にも温度差があるので、学生の言い分や思いもきちんと受けとめた上で指導する必要がある。

- 実習を行う態度について、実習全般において意欲的に臨めていたかどうかを評価する「勤務態度」と具体的に指導を必要とする場面で素直に実習先の指導に従っていたかどうかを評価する「指導･助言を受ける態度」に、保育実習Ⅱより分けたところ、意欲的に実習を行うことがより難しいことがあらためて明らかになった。
- 学生としての甘えは捨てて先生として実習に臨むことをより明確にすべきであるので、実習態度などの評価基準から「実習生として」は今後も削除する。
- 実習中の質問力向上にはまだまだ指導の余地があるが、学生を受け身の状態においた指導では効果は得られにくい。学生が実習を通して把握した課題をタイミングよく捉えて、主体的に取り組む姿勢を引き出す必要がある。しかしながら、質問という方法論を強調しすぎると、肝心の実習で「何を学ぶか」という目的意識が希薄になる。
- 評価票の改訂も学生が履修する実習を見通しながら行わなければならない。今回の“ズレ”の分析からは、保育実習Ⅰｂに日誌についての評価内容を含め、保育実習Ⅱに保育士のチームワークの理解についての評価内容を含めるべきであることが示唆された。また、保育実習Ⅰｂの「前日までの反省を踏まえて、より適切に利用児・者に対応しようとする姿勢が見られた」は必要な評価内容であることが確認された。
- 評価票より高く“ズレ”て自己評価している学生に目を奪われがちであるが、実習先よりきちんと評価されているにも関わらず自己評価が低く“ズレ”ている学生への指導も忘れてはならない。

謝辞

評価票及び学生の自己評価を集約・分析するに当たって、宮崎国際大学の野﨑秀正准教授に統計的な処理を施していただきました。ご協力に心から感謝いたします。野﨑先生と十分に検討する場を確保できず生かしきれなかった分析結果については、今後研究を継続していくなかで役立てていきたいと考えます。

参考文献・資料

1）無藤隆監修『よくわかる NEW保育・教育実習テキスト－保育所・施設・幼稚園・小学校実習を充実させるために－』診断と治療社 2008年
2）全国保育士養成協議会編『保育実習指導のミニマムスタンダード―現場と養成校が協働して保育士を育てる―』北大路書房　2007年
3）佐々木昌代　大坪祥子　大坪邦資「施設実習の意義を再確認する－履修後のアンケート調査から－」宮崎学園短期大学紀要　第１号95-105頁　平成21年 3月
4）佐々木昌代　大坪祥子　中武亮子「実習評価における“ズレ”の分析（Ⅰ）～第１回保育所実習の評価票と学生の自己評価について～」全国保育士養成協議会第52回研究大会研究発表論文集394-395頁　平成25年 ９月
5）佐々木昌代　久松尚美「実習評価における“ズレ”の分析（Ⅱ）～保育所実習と施設実習における評価票と学生の自己評価について～」全国保育士養成協議会第53回研究大会研究発表論文集　　264頁　平成26年 ９月